

新子を読む 新子へ詠む

時実新子没後10年 2

わたし今 日本一の馬鹿娘 新子

川柳作家

芳賀博子さん

今の時代、こんなふう生きてみたい、と思わせる。エネルギーがほとばしる直感の1句だ。声に出した時に破裂音が多く、リズムがいい。「日本一」「馬鹿娘」という言葉からは、うなだれるのではなく、1回しかない人生を生きるという強い意志を感じる。

「馬鹿」は他の新子作品でもいくつか使われているが、全て他者ではなく、自分に向けたものだ。《まだ咲いているのは夾竹桃のバカ》《神様ごらんください馬鹿が眠ります》など、弾けた印象を残す。

句は作者を離れて自由に読んで受け取り方も変わる。川柳にはそんな面白さもある。生徒に泣いて怒り、泣いて褒める人だった。自由に生きる半面、お手製のおでんで門下生をもてなしてくれるなど、古風な気遣いも心に残っている。

10年という時が流れたことで、

流れに逆らい自由に生きる



川柳を始めたころの時実新子さん。長女、長男と1950年代

いいものだが、あえて新子を重ねるなら、逆風や毀譽褒貶をものともせず生ききった姿が浮かぶ。1993年の作で、当時、新子は64歳だが「この生き方で生きていく」という強い思いがうかがえる。恋に限らず、人生はもつと自由でいいのではないか。子どもが手を離れたこともあり「母」という役割から離れて、自分に立ち返る時期だと考えるようになった。受け手が年を重ねることで、作品の

亡くなった直後と違い、改めて作品を落着いて読める状況にある。「リアル新子」を知らない人が、新子句とどのように出会うのかも興味深い。「有夫恋」など、時代と合致して世に出たと見られがちだが、今も作品は人々の心をとらえている。

また、急激に発達したインターネットの影響で、川柳が読まれる場所、時間、スタイルも大きく変化した。ツイッターを発表の場として使うケースもある。川柳は文章が短いので、相性がいいのではないか。この楽しみ方が一過性か、定着するのかは分からないが、もし新子先生が見れば面白がりそう

咲いてゆく遠心力をフルにして

博子

(まとめ・太中麻美)



はが・ひろこ 1961年神戸市生まれ。山陽新聞「山陽柳壇」選者。コピーライター時代に「時実新子の川柳大学」に投句を始める。現在、同名のオフィシャルサイト管理人を務める。川柳グループ「宙」を拠点に、新聞や雑誌などで活動している。